

## 「地域における公設スキー場の存続意義」

### ～スノー文化継承への取り組み～



岐阜県飛騨市 籠戸 重明

#### 1. はじめに

##### (1) 研究の背景・目的

飛騨市では古くからスキーは身近なものであり、学校の課外授業に取り入れられるなど子どもの頃からスキーに親しむ文化が根付いている。それを支えてきたのが市内2箇所の公設スキー場であり、市民にとってスノー文化の拠点として長く親しまれてきた。

国が掲げるまち・ひと・しごと創生長期ビジョンでは「自らの地域資源を活用した、多様な地域社会の形成を目指す」としており、地域資源を活用した地域づくりの必要性を示している。今後、独自性を持った魅力ある地域を形成するためには、これまで培ってきた文化を継承しつつ、豊富な地域資源を活かした新たな取り組みが必要になると考えられる。

そこで、これまでのように市内のスキー場を、単に観光交流、市民の体力増進と位置づけるだけでなく、雪を魅力ある地域資源として捉え、スノー文化の拠点となるよう、魅力的な取り組みを推進することが必要であると考えた。

本レポートでは、厳しい経営状況の中、公費を投入しながら運営している2つの公設スキー場を、今後もスノー文化の拠点として活用していく取り組みを考察し、次の点を明らかにすることを目的とする。まず、2つの公設スキー場の現状を把握し、地域にとってどのような関わりや役割を果たしているか明らかにする。次に2つの公設スキー場にはどのような課題があり、どのような取り組みが必要なのかを考察し、それらの課題に対し具体的提言を行い、公設スキー場がスノー文化の継承に繋げる拠点となるための方策について考える。

##### (2) 研究方法

本研究は、文献調査及びヒアリング調査の手法を用いて行った。ヒアリング調査は、より客観的な視点から考察を行うため、地元利用者、地域住民、運営会社等複数の関係者に対し実施した。

次に研究の流れとして、まずヒアリング調査により、市内の2つの公設スキー場が、地域にとってどのような役割や存在意義があるのか分析した。次に文献資料等を参考とし、国内のスキー場の状況を把握した。そしてこれらを踏まえ、それぞれのスキー場における課題を考察し、ヒアリング調査による結果をもとに、課題に対する具体的提言を行う。

#### 2. スキー場の現状・役割

本章では、市内の公設スキー場の現状を把握し、それぞれのスキー場は地域にとってどのような関わりや役割を果たしているかを分析し、地域におけるスキー場の存在意義を明

らかにする。それに加え、国内のスキー場の状況を把握し、市内のスキー場との比較を行い、課題に対する参考資料とする。

(1) 飛騨市内のスキー場

飛騨市には河合町の飛騨かわいスキー場（以下かわいスキー場）と、神岡町のスターシュプール緑風リゾートひだ流葉（以下流葉スキー場）の2つの公設スキー場がある。これらは飛騨市が誕生する町村合併以前の平成14年までそれぞれ直営スキー場として経営を行っていた。その後、かわいスキー場は指定管理制度の導入より指定管理者が経営し、流葉スキー場は市からの経営移譲により民間事業者が経営している。

かわいスキー場はリフト数が少ない小規模型のスキー場であり、客層は地元の利用者が多く地域のファミリーゲレンデとなっている。一方、流葉スキー場はクワッドリフト（4人乗りリフト）1基、ペアリフト6基を擁し、飛騨エリアのスキー場の中では規模の大きいスキー場であり（表1参照）、客層をみると県外客が半数以上を占める。また来場者数をかわいスキー場と比較すると3倍以上の差がある（図1参照）。

この2つのスキー場は、市内の東西にそれぞれ位置し、市民は自宅からアクセスの良いスキー場を利用している。西側に位置する古川町、河合町、宮川町の市民は主にかわいスキー場を利用し、東側に位置する神岡町の市民は主に流葉スキー場を利用している（図2参照）。

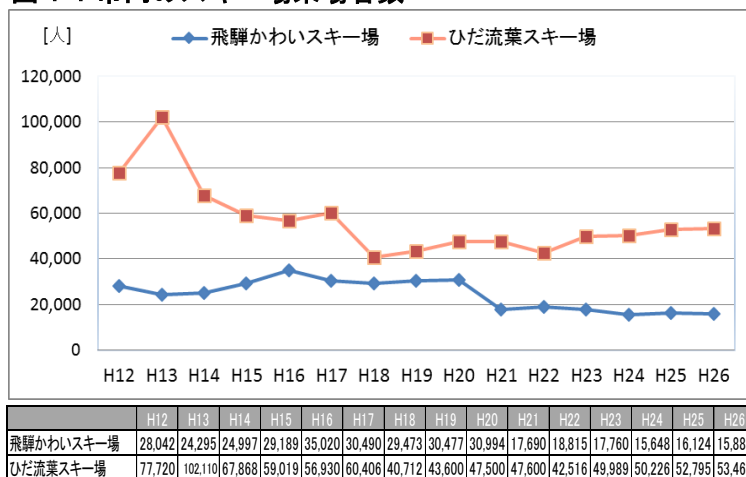
このようにスキー場の規模を始め、客層や市民の利用状況からみても2つのスキー場には大きな違いがみられる。

表1：飛騨エリアのスキー場一覧

スキー場	索道数	最大滑走距離	所在地
飛騨かわいスキー場	ペア3 シングル1	1800m	飛騨市河合町
ひだ流葉スキー場	クワッド1 ペア6	3000m	飛騨市神岡町
平湯温泉スキー場	ペア2	2800m	高山市奥飛騨温泉郷平湯
ほうのき平	クワッド1 ペア5	2000m	高山市丹生川町
ひだ舟山スノーリゾートアルコピア	クワッド2 ペア1 シングル1	2300m	高山市久々野町
白川郷平瀬温泉白弓スキー場	ペア1	1000m	白川村
荘川高原	ペア2	1000m	高山市荘川町
飛騨高山	ペア2 シングル1	2000m	高山市岩井町
モンデウス飛騨位山スノーパーク	クワッド1 ペア2 シングル1	1700m	高山市一之宮町

※クワッド（4人乗りリフト）、ペア（2人乗りリフト）、シングル（1人乗りリフト）  
 ※全国のスキー場から生情報を発信 SNOWNET14/15 <http://snownet.jp/>より作成

図1：市内のスキー場来場者数



※岐阜県観光レクリエーション動態調査より作成

図2：市内スキー場の位置図



## (2) かわいスキー場の現状・役割

かわいスキー場は、指定管理制度が導入される以前は、市の直営として経営されていたが、制度が導入された平成 17 年には、飛騨市森林組合が指定管理者として経営を行い、その後平成 21 年からは、現在の指定管理者である株式会社ねっとかわい(以下ねっとかわい)が経営を行っている。ねっとかわいは、旧河合村時代に第 3 セクターとして設立され、現在も指定管理者として河合町内にある入浴施設や旅館、キャンプ場などの観光施設等を複数経営しており地域に根差した会社である。そのため、スキー場経営においても地域住民の利用を重要視しており、これまでは安全面に配慮しつつコスト削減を意識しながら、地域住民が親しみやすいファミリーグレンデになるような取り組みを行ってきた。なお、主な取り組み内容を表 2 に示す。

表 2：かわいスキー場の取り組み内容

① 地元利用者を対象に年に数回感謝デーを開催している。バザーや雪中宝探し等のイベントを行い家族連れで賑わいをみせている。イベントには地元稲越地区の若者で結成される雪匠組(別添資料 1 参照)がボランティアで巨大雪像を作成し、地域住民と連携してイベントを盛り上げている。
② 雪山を造成し、ソリやチューブスライダー等の乗り場として無料で開放している。また隣接するセンターロッジ内には、プレイルームを設置し幼年期の子ども達に人気があり、休日は家族連れで賑っている。休憩所を兼ねるセンターロッジのレストランでは、子どもの送迎に訪れた母親たちが自然と集まり、子どもの話や世間話に花を咲かせている。
③ 地域の子どもたちがシーズンを通じてスキー場に足を運びやすいよう、シーズン券の価格を低価格(10,000 円)に設定。近隣スキー場と比較すると半額以下となる。

かわいスキー場の客層をみると、自宅からのアクセスが良いことから、古川町、河合町、宮川町のファミリー層が多い。これら 3 町の小学生が所属するスキースポーツ少年団(以下スキージュニア)は 3 団体あり、2015-16 シーズンは、約 70 名の子ども達がスキー競技の練習場として活用している。平成 27 年 2 月には、かわいスキージュニア出身の根尾昂選手が全国中学スキー大会男子回転で見事優勝に輝いており、地元指導者や保護者の熱心な取り組みによる本格的な指導も行われている。また、近隣小学校 4 校の課外授業としてスキー教室が年 2 回開催され、子ども達の社会教育、スノースポーツの振興の場として活用されている。さらに地元住民も、地域におけるスキー場の重要性を認識しており、地元のスキー場を維持するため、河合町町内会を中心とした地元住民によるグレンデ内の草刈り作業が毎年シーズン前に行われ、平成 27 年 10 月に実施した際には 113 名の参加があった。また、春にはスキージュニアの子ども達が、日頃お世話になっているスキー場に感謝の気持ちを含めてグレンデのゴミ拾いを行っている。

このようにかわいスキー場は、客層、地域との関わり方、運営会社を含めて地域に密着したスキー場となっており、地域住民のスポーツ振興の場、子どもを通じた住民同士の交流の場として重要な役割を果たしている。

### (3) 流葉スキー場の現状・役割

流葉スキー場は、平成 15 年から市からの経営移譲により大阪緑風観光株式会社（以下緑風観光）が経営を行っている。本社は大阪府茨木市にあり、関西方面を中心に観光等の貸切バス事業を主に営んでいる。このような業種の利点を活かし、会社独自や旅行代理店との提携によるスキーバスツアーを企画し、関西、名古屋方面からの誘客を積極的に行っている。

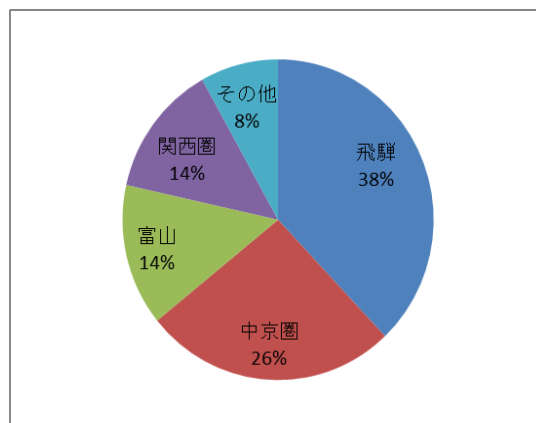
市民の利用状況をみると、神岡町の住民の利用が多いが、若者グループを中心とした県外からの客層も多い。図 3 に示すとおり平成 26 年度における車ナンバーによる来場者の内訳をみると、飛騨エリア 38%、中京圏 26%、富山 14%、関西圏 14% となっており、バスツアー以外の来場者においても 6 割以上が飛騨エリア以外からの来場者となっている。また、平成 12 年からの来場者数をみると年々減少傾向であったが、平成 23 年以降は増加傾向にある。平成 26 年には 53,467 人来場し、4 年前と比較すると、約 11,000 人増加しており、近年では順調に客足が伸びている状況となっている（図 1 参照）。スキー場の規模をみると、飛騨エリアでは規模の大きいスキー場となっている。そのため多くの従業員を雇用しており、繁忙期のみ雇用する臨時的雇用を含めると約 55 名雇用し、専業農家や土木作業員等の季節労働者の貴重な雇用の場となっている。またスキー場の周辺には旅館や、民宿等の宿泊施設が 18 軒、レストラン等の飲食店が 9 店舗営業しており、観光資源の乏しい冬期においてはスキー客が貴重な顧客となっている。

このように流葉スキー場は、都市部や県外からの交流人口を生みだし、冬期間における地域の観光資源として観光産業を支える重要な役割を果たしている。一方でかわいスキー場と比較すると地域住民の利用を促す取り組みが乏しい一面もみられる。

### (4) 国内のスキー場の現状

国内のスキー人口は、娯楽の多様化や若年層の減少等により年々下降している。「レジャー白書 2013」（公益財団法人 日本生産性本部）によると、スキー・スノーボード人口は 1998 年にピークとなり 1,800 万人に達した。しかしその後は、減少傾向で推移し、2013 年には 770 万人になりピーク時の 4 割強まで減少している（図 4 参照）。この影響を受け国内のスキー場では厳しい経営状況になり、閉鎖になるスキー場が増加した。一方で、ここ 2 年のスキー人口やスキー用品の売上は横ばい推移となり、急激な減少から回復基調との見方もあり、明るい兆しもみられる。このような状況の中、国内各地のスキー場では生き残りをかけて様々な取り組みを行っている。また、経営体制を抜本的に見直すスキー場や、新たにスキー場再生事業に参入する企業などスキー場経営を巡る動きは加速している。いずれにせよ、近年の少子高齢化社会の進展や人口減少時代の到来、景気の伸び悩みなどを踏ま

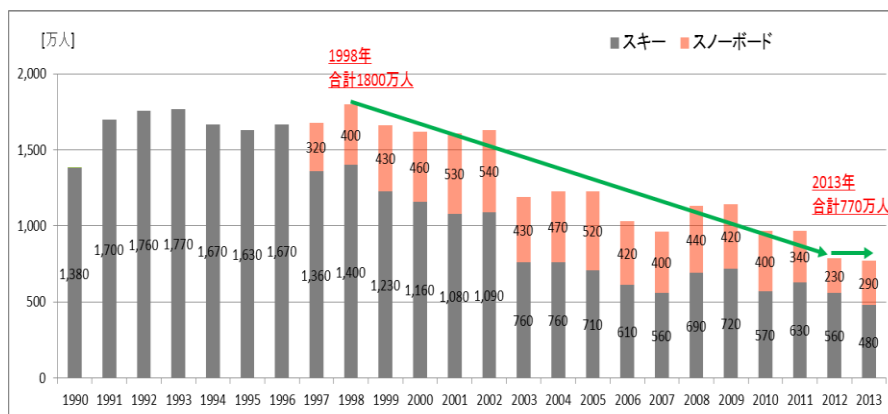
図 3：車ナンバーによる来場者の内訳



※平成 26 年度流葉スキー場経営報告  
ナンバー別駐車場状況により作成

えると、今後も急激にスキー人口が増えることは考えにくいことから、国内のスキー場は依然として厳しい経営状況が続くことが予想され、市内のスキー場も同じ状況が考えられる。

図4：国内スキー人口の推移



※国土交通省観光庁HP スノーリゾート地域の現状より作成  
<http://www.mlit.go.jp/kankocho/>

### 3. スキー場の課題

この章では、2つの公設スキー場を末永く存続させ、また地域との関わりを深めるためにはどのような課題があり、どのような取り組みが必要なのか考察し明らかにする。

#### (1) かわいスキー場の課題

かわいスキー場の来場者数は、ここ3年横ばい推移であるが、10年前の来場者数と比較すると半数以下(図1参照)となっており、依然としてスキー場の経営自体は厳しい状況におかれている。また飛騨市においても、人口減少、少子高齢化等により自主財源が減少する一方、高齢者人口の増加により社会保障費は増加傾向にあり、市の財政は逼迫した状況にあることから、平成25年度より「商工・観光分野の指定管理施設の抜本的経営改革」を推進しており、商工及び観光関連の指定管理施設の経営見直しを行っている。これによりかわいスキー場も、見直し対象施設となった。市は、平成27年度から段階的に指定管理料を減額していく方針で、平成26年度に14,788千円だった指定管理料を、平成30年度には2,433千円にまで減額するという厳しい内容を示した。平成26年度のかわいスキー場の経営収支表(表3参照)をみると、指定管理料14,788千円を収入に含めると6,330千円の黒字になるが、今後市の提案どおり指定管

表3：かわいスキー場平成26年度経営収支表  
 単位：円

区 分		金 額
収入	指定管理料	14,788,000
	リフト利用料金収入	17,618,520
	飲食・商品売上	11,775,575
	雑入	1,463,191
	<b>収入計</b>	<b>45,645,286</b>
支出	売上原価	4,281,266
	人件費	15,903,479
	管理費	14,501,781
	運営費・事務費	2,597,516
	消費税等	2,030,951
	<b>支出計</b>	<b>39,314,993</b>
<b>純利益</b>		<b>6,330,293</b>

※株式会社ねとかわい 指定管理報告用  
 平成26年度収支実績表より作成

料金が減額されると平成 30 年度には約 6,000 千円の赤字に転落することになり、スキー場は閉鎖に追い込まれる可能性が高まることになる。

かわいスキー場が閉鎖になると、雇用や地域経済はもとより、地域にとって様々な負の影響を及ぼすことが考えられる。かわいスキー場は、地理的要件から古川町、河合町、宮川町の住民が多く利用しているが、閉鎖された場合、それら 3 町の利用者は市内にあるもう一方のスキー場である、流葉スキー場を利用する可能性は低い。その理由は、3 町から流葉スキー場までのアクセスが峠を越す必要があり、休日に気軽に行ける身近なスキー場にはならないためである。これにより、3 町のスキージュニアやファミリー層は、スキー場に足を運ぶ機会を無くし、スキーをやらなくなる市民の増加が懸念される。雪という地域資源を活用したスキーに親しむ文化が失われた場合、住民の地域への愛着や、誇りの喪失に繋がることを考えられる。

このような状況を打開するためには、スキー場の魅力をさらに引き出し、スキー場の存在意義を高める取り組みや、より一層の集客を図るための経営改善も必要となる。そしてこれらの取り組みは運営会社だけで行うのではなく、スキー場の閉鎖が地域に及ぼす影響を真摯に受け止め、行政、地域、スキー場に関わる者等が連携してスキー場を支えいくことが重要になると考える。

## (2) 流葉スキー場の課題

近年の国内でのスキー人口が減少傾向にある中、もう一つの流葉スキー場においては、来場者数が 4 年前から増加傾向にある。スキー場支配人へのヒアリング調査を行った結果、客足が伸びた要因について次の点が浮かび上がった。

支配人によると、天然雪の良質なパウダースノーが魅力となり、近年雪質に拘るスキーヤー、スノーボーダーが増えていることから、来場者数の増加に繋がっているということであった。特に標高約 1,400m に位置する山頂ゲレンデは、雪質も良く降雪量も多いため、パウダー（非圧雪）ゲレンデとして人気が高いとのことだった。またリフト待ちがほとんどない隠れ家ゲレンデとして、SNS などによる口コミにより人気を集めているという。

しかしながら、これらの集客効果はスキー場経営としての積極的な取り組みではないことから、今後はスキー場利用者のニーズを把握した新たな取り組みが必要になると考えられる。

近年では、バブル時代にスキーを楽しんでいた 30 代後半から 40 代の人が、家庭を持って子どもと一緒にスキー場を訪れるケースが増えている。これにより、多くのスキー場がファミリー層の誘客を重要視しており、キッズパークや子どものプレイルームはもとより、ファミリー層を優先した駐車場や託児所を設けるスキー場も出てきている。

このような状況の中、流葉スキー場においてはプレイルームの設置がなく、キッズパーク自体もそり乗り場がメインとなり簡素的なものとなっている。また、キッズパーク付近に休憩所もなく、公衆トイレの場所も離れており、ファミリー層に配慮された取り組みが乏しい。

流葉スキー場を全体的に見渡してみると、下部ゲレンデは緩斜面が広がり、ゲレンデ内

は込み合っていないため初級者の子どもでも十分に楽しめるゲレンデである。またセンターロジ（M プラザ）には流葉温泉が併合されていることから、アフタースキーは家族でゆっくりくつろぐことができ、ファミリー層を誘客できる要素が整っていると考えられる。スキー場の潜在能力を最大限引きだし、新たな客層を誘致するためにも、ファミリー層をターゲットとした取り組みを行うことが課題の一つとして挙げられる。

もう一つの課題として、支配人によると、県外からの客足が伸びているものの、地元神岡町の利用者が減っているという見解もあった。その要因としては、運営会社である緑風観光においては、元来は観光バス事業を営んでいることや、本社が大阪にあることから、関西、中部圏の誘客においては優れており、バスツアーの企画により一定の来場者を誘客しているが、地元住民に対する誘客施策が薄いという見方もある。また地元小学校である神岡小学校では、年2回開催されていたスキー教室が、保護者からの要望により数年前から年1回に減らされている。その背景には保護者の多くがスノーボード世代となっており、スキーを教えられない保護者が増えていることや、スキーではなく、スノーボードに興味を持つ子どもが増え、子ども達にとってスキー自体が魅力を感じられないスポーツになっているのだという。

これらを踏まえ、流葉スキー場では今後、時代のニーズに合わせスノーボードを取り入れた取り組みを行うなど、スキー場が地域の子供達にとってスノー文化と触れ合える雪の遊び場となり、また地域住民の交流の場となるような取り組みが必要であると考えられる。

#### 4. 課題に対する提言

この提言では、3章で明らかになった課題を踏まえ、スキー場の経営改善を通じて、住民が雪に親しみ、スノー文化を伝えるための拠点としてスキー場が存続できるような取り組みを提言する。

##### (1) 提言の背景

飛騨市は古くから雪国として雪を克服するだけでなく、その恵みを生活の営みに活かし、雪と共に文化を醸成してきた。冷蔵庫が各家庭になかった時代、冬の間、雪国では野菜を土中に埋め、雪で覆い、雪と共生する暮らしをし、さらに子どもはそり遊び、スキー、雪合戦など雪と遊び、また雪の結晶が生み出す自然の美しさにふれてきた。しかし、現在では急速に進んだ近代化により機器や家電製品が生活に普及し、雪を利用してきた文化が途絶えつつある。これにより、雪の存在は住民にとってやっかいものとして捉えられ、地域の衰退に拍車をかける要因の一つとなっている。

このような中、そり遊び、スキー、雪合戦などの雪遊びは現在も継承され、雪国の魅力となっている。ここでの提言は、スキー場を維持するための経営上の改善対策だけではなく、雪を魅力ある地域資源と捉え、スキー場がスノー文化の一つである雪遊びの拠点として地域の魅力を継承していく場となることを目的とする。

##### (2) かわいスキー場の課題に対する提言

かわいスキー場は、指定管理料の減額により厳しい経営状況が予想される。この状況を打開するためには、当然ながらこれまでの経営方法を見直す必要がある。もう一方でスノー文化の拠点として、また地域への愛着、誇りにつながる取り組みを行う場として、一定の公費を投入してでも存続させる意義を高める取り組みも必要となる。そしてこれらの取り組みは、運営会社だけではなく、地域、行政、スキー場に関わるものが一体となった取り組みが必要となる。これらを踏まえ次の施策を提言する。

### 提言：かわいスキー場活性化プロジェクトチームの設置

地域のスキー場関係者が一丸となり、スキー場を活性化させることを目的とした組織を設置し、様々な視点からスキー場についての横断的な話し合いを行う。事務局は飛騨市河合振興事務所産業振興係におき月1回程度会議を開催する。メンバーは、ねっとかわい、観光協会、地域振興協議会、さらに雪匠組のほか、iori・バルステクノロジー（別添資料1参照）のような、かわいスキー場に愛着をもつ地元企業を含めたスキー場に関わる企業・団体等で構成する。

このプロジェクトチームの設置により、これまで運営会社であるねっとかわいが主体となってきたスキー場経営を見直す機会となり、異なる分野からの視点による新たな取り組みが生まれる可能性が期待できる。例えば、ioriでは、旅館業を営んでいることからSNSやインターネットを活用した情報発信を得意としており、この組織で協力体制が整えば、ねっとかわいが苦手としていた分野でのスキー場の情報発信が可能となる。また、ioriの客層の6割以上が外国人ということもあり、インバウンド誘致や受け入れ態勢整備などの助言や協力も得ることができる。このように、組織の設置によりそれぞれの経験やスキルを活かした取り組みが行えることになる。そしてこれらの取り組みは経営改善に繋がるだけでなく、スノー文化の拠点として地域の魅力を引き出すことに繋がることも期待できる。なお、プロジェクトチームによる取り組みの一例として次の企画を提案する。

#### 企画① かまくらカフェの開催

雪匠組の協力により巨大かまくらを造成し、ねっとかわい主催のイベントに併せかまくらカフェを開催する。かまくら内には装飾を施しホットココアをはじめ、昔から親しみのあるお汁粉や甘酒などを無料で振る舞うなど、子どもの楽しめる企画を実施しイベント効果を高める。子どもの遊びの多様化により、最近ではかまくらを見かけることが少なくなりましたが、この取り組みにより、スノー文化の魅力を子ども達に伝えることができる。

また、かまくらの外では雪を活用したワークショップとしてアイスクリーム作り体験を行い、子ども達に楽しみながら、雪を活用する魅力を体験してもらう。

#### 企画② スキー、スノーボードの製作体験ツアーの開催

スノーボード製作の研究に取り組んでいるバルステクノロジーの協力により、スキー、スノーボードの製作体験ツアーを行う。スキー場の敷地内の立木をチェーンソーで切ることから始まり、木材をスキー、スノーボードの形に成形し、エッジ、ソールを張り付け、オ



ンリーワンの板を製作する。スキー場敷地内では輪かんじき（別添資料2参照）をはいて移動し、チェンソーで切った木材を手ざり（別添資料2参照）で搬出するなど、先人たちが活用してきたスノー文化を体験することもできる。完成後は、手作りの板でゲレンデを思う存分滑走もできる。地域の資源である雪と木を結び付けた取り組みであり、地域の魅力を高めることにも繋がる。また、地元の利用者のみならず、都市部のコアな客層をターゲットとした新たな取り組みでもある。

### （3）流葉スキー場の課題に対する提言

流葉スキー場は、地域住民（神岡町）のスキー場離れにより、スノー文化の拠点としての役割が希薄化していることから、ニーズに合わせた新たな施策や、地域住民が少しでもスキー場に足を運ぶような取り組みが必要である。これらを踏まえ、ヒアリング調査によって得られた結果と、文献資料を参考に次のとおり施策を提言する。

#### 提言① 空き店舗を利用したキッズハウスの設置

PILEDRIVER（別添資料1参照）社長の分析する子育て世代のニーズ（別添資料3参照）や、長野県短期大学紀要2015「キッズパークによるスキー場の活性化に関する事例研究」での研究結果における子育て世代のニーズ（別添資料4参照）によれば、子育て世代が親子で楽しめるスキー場へのニーズがあることが確認できる。そこで、これらの情報をもとにスキー場の空き店舗を利用したキッズハウスの設置を提案する。なおキッズハウスの概要（案）については表3に示すとおりである。このキッズハウスを設置することによりファミリー層という新たな客層の誘致、子ども達のスノースポーツの促進、雪と子どもを結び付けた地域住民の交流の場となる等様々な相乗効果が期待できる。

表3 キッズハウスの概要（案）

① 託児所設置	子どもを預けてのびのび滑りたいスキーヤーが増えている。有料となるが、ファミリー層をターゲットとした新たな誘客が見込まれる。
② 子ども用スノーボード無料レンタル	PILEDRIVERの協力によりメーカーを通じ子ども用スノーボードの無料レンタルを行う。スノーボードをやりたいが道具がないから出来ない子どもが多い。地元の子供達がスノースポーツを楽しむことができ、スキー場に足を運ぶ機会も増える。また親子でスノーボードが楽しめる機会も増える。
③ 子ども用ボルタリングの設置	地元神岡町のボルタリング場の経営者の協力を頂き、子ども用のボルタリング用壁を設置。スキーに飽きた子どもが遊べるように、また地域の子どもの遊具として無料開放。
④ プレイルームの設置	子どもが遊べるプレイルームを設置し無料開放。地域住民や関係者の家に余っているようなおもちゃを活用し、親子で楽しめる空間に。また、乳幼児のおむつ交換場所を設置し、幅広い子育て世代が利用しやすいようにする。
⑤ コミュニティスペースの設置	地域の住民やスキーの利用客が休憩できるスペースを設置する。地域住民同士の交流、スキー客などの地域外の人との交流も子どもを通じてできる。また、そばにはソリ乗り場があるので、雪遊びをしたい子どもの遊び場と併用して活用。

## 提言② ソールフードの販売

流葉スキー場内には、食堂やレストランは多く存在するが、若者の利用が多いファーストフード店が存在しない。キッズハウス内の厨房を利用し、地元神岡町の山之村牧場のソーセージをはじめ、飛騨のソールフードである、みだらしだんご、五平餅、飛騨牛の串焼き、飛騨牛コロッケなどを販売する。キッズハウスの利用者だけでなく、都市部や県外からの来場者にも飛騨の魅力を発信できる。また雪と食文化を結び付けることによりスキー場の新たな魅力を引き出すことにも繋がる。

## 5. おわりに

この研究を通じて、複数の関係者からヒアリング調査を行った結果、かわいスキー場は地域に密着したファミリーゲレンデとして、流葉スキー場は交流人口を生み出す地域の貴重な観光資源としてそれぞれ地域にとって重要な役割を果たしていることがわかった。一方で、国内のスキー産業は依然として厳しい状況にある中、市内のスキー場においても、厳しい経営状況や新たな取り組みの必要性など課題も明らかとなった。また、ヒアリング調査を行った関係者の中には、地域におけるスキー場の重要性や存続の危機を感じており、スキー場を再生しようという気概のある人材が多く存在することが確認できた。

今後もスキー場を末永く存続させるためには、魅力ある資源を有効に活用し、運営会社のみならず、行政、地域、スキー場に関わる者が一体となって、新たな取り組みを行うことが必要であり、この取り組みによってスキー場の新たな存続意義が生まれ、次の世代にスノー文化を継承するきっかけになっていくのではないだろうか。

私も市の職員であることはもちろん、また地域の一員として、そしてスキー場の愛好者として2つの公設スキー場のために今後も積極的に関わっていきたい。

## 【参考文献・資料】

- ▽尾造恒宇『北海道における中小スキー場の存在意義』2011
- ▽神岡町「ひだ流葉スキー場整備事業」
- ▽河合村「飛騨かわいスキー場・30年の沿革」
- ▽国土交通省観光庁HP 「スノーリゾート地域の現状」<http://www.mlit.go.jp/kankocho/>
- ▽国土交通省北海道運輸局『地域のスキー場の活性化に関する調査』2008
- ▽下平佳江・加藤麻樹『スノーパークによるスキー場の活性化に関する事例研究ノート』2015
- ▽DAIAMOND online 「私たちをスキーに連れてって！今また、ゲレンデが家族連れで賑わうわけ」<http://diamond.jp/articles/-/32345>
- ▽「レジャー白書2013」（公益財団法人 日本生産性本部）

## (別添資料1) 関係企業・事業者・団体情報

名 称	概 要
せつしょう 雪匠組	かわいスキー場の地元である河合町稲越地区の住民を中心に、古川町の有志も含めた20～40代の男女30人ほどで結成されている。もともとは彼らの親の世代が旧河合村の一大イベントであった「雪まつり」で数十メートルある巨大雪像をひと月ほどかけて作るなどイベントの中心的な役割を果たしてきた。その後彼らがその役割を引き継いたが、市からの補助金の減額によりその穴埋めとしてボランティア作業の負担が一層大きくなり、数年前に「雪まつり」の継続を断念した。その後も地元のために何かやりたいという思いが強く、組は活動を続け、現在はかわいスキー場のイベント時に雪像を作り地域を盛り上げている。
ゲストハウス iori (いおり)	古川町にある古民家を改装しゲストハウスとして営業している。利用客の6割が外国人であり、SNSを活用した情報発信に長けている。オーナーはかわいスキー場の全盛期(H16年頃)に毎週のように足を運んでいた経緯もあり、かつての賑わいをまた取り戻したい思いがある。
山林施業会社 バルステクノ ロジー	Iターン者3名を中心に平成26年に立ち上げた林業会社である。そのうちのひとり、かわいスキー場の全盛期(H16年頃)に経営の中心となり徹底したパークの管理や圧雪を行い、様々な集客戦略を手掛けていた。 また、もうひとり、スノーボードに魅了され20年前から移住しており、市内のスキー場を滑りつくしている。過去には流葉スキー場のスタッフであった経緯もあり、スキー場運営にも携わっていた。 現在は間伐事業など、山林施業を中心に事業を展開しているが、その傍ら、地元の木材を使ってスノーボードやスキー板を製作する研究に取り組んでおり、将来的にはそれを飛騨の産業の一つに発展させたい思いがある。
PILEDRIVER	飛騨エリアで唯一のスノーボードショップである。飛騨エリアのスキー場で様々なイベントを企画実施し、地域のスノースポーツ振興に貢献している。流葉スキー場においても、スノーボードが流行し始めた頃からこのショップにより多くのイベントが開催され、関わりは深いものとなっている。また地元スノーボーダーが多く訪れ、店員からのアドバイスや情報交換を行う場となっており、地域に根差したスノーボードショップとなっている。

## (別添資料2) 雪に関わる用具

用具名	用具説明
輪かんじき	輪かんじきとは、雪国で古くから伝わる雪の上を歩きやすくする道具である。踏み固められていない雪の上をふつうの靴で歩くと足を取られて思うように歩けないが、輪かんじきをはくことによって、体重を分散させることで雪の上を歩きやすくする。形は異なるが、西洋ではスノーシューという。
手ぞり	手ぞりとは、雪深い山から伐採した木材を運ぶための道具で、一昔前、雪国では伐採した木材を手ぞりに積み、それを雪で滑らせ山から木材を搬出した。近年では林業機械の普及によりほとんどみられなくなった。

(別添資料3) PILEDRIVER 社長からの提案内容

「スキー場の空き店舗となっているレストランを、キッズハウスに活用」

(PILEDRIVER 社長へのヒアリングより)

地元スノーボードショップ PILEDRIVER 社長によると、現在の子育て世代は共働き世帯が増えたことにより、スノーボードをやりたくても、育児や、時間に追われスキー場に行く機会を失っている。またスノーボードを子どもにやらせたくても、経済的な理由もあり、子どもに道具を用意する余裕がないという。子育て世代や、その子ども達が少しでもスキー場に足を運ぶように次のような取り組みを行ってはどうかと提案された。

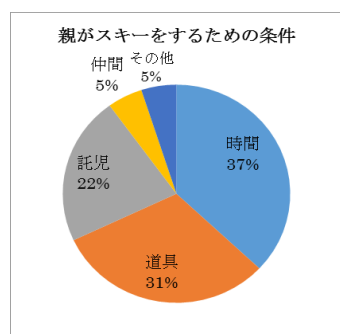
## 【提案内容】

流葉スキー場のキッズパーク付近に空き店舗となったレストランがある。そこを託児所、子どもの無料プレイルーム、スノーボードの無料レンタル、子ども用ボルタリングなどを設置し、スキーヤーやスノーボーダーのための託児所だけでなく、地域住民が気軽に足を運べるようなコミュニティ要素の強いキッズハウスとして活用してはどうか。

(別添資料4) 親がスキーをするために必要な条件

(長野県短期大学紀要 2015 「キッズパークによるスキー場の活性化に関する事例研究」より)

この研究によると、子育て世代のニーズを把握するため、アンケート調査を行った結果、親がスキーをするために必要な条件としての回答が、「時間」と答える利用者が多く、親がスキーをするのに時間的にゆとりがないことが明らかになった。また次に必要なものとして、「道具」が挙げられ、その次に「託児施設」となった。また「親も短時間でもスキーがしたいので子どもだけで遊べる場所があるとよい」という意見もあった。



←長野県短期大学紀要 キッズパークによるスキー場の活性化に関する事例研究より

長野県飯綱高原スキー場のキッズパーク利用者 48 名にアンケート調査を行った結果 (2013 年 2 月実施)

【ヒアリング実施対象者等】

実施対象者	実施日
緑風観光株式会社 支配人	H27. 7. 22
株式会社ねっとかわい 社長及び従業員 3 名	H27. 8. 6
スポーツ少年団関係者	H27. 9. 4
河合町地元住民 2 名	H27. 9. 8
PILEDRIVER 社長及び店員	H27. 9. 12
市教育委員会学校教育課	H27. 9. 18
河合スキークラブ 総会出席	H27. 10. 17
雪匠組 関係者 2 名	H27. 10. 18
ゲストハウスiori オーナー	H27. 11. 6
山林施業会社 (株) バルステクノロジー 役員 2 名	H27. 11. 6
市観光課神岡振興事務所産業振興係	数回